



TITLE:

火星が近づく

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 火星が近づく. 天界 1926, 6(67): 395-398

ISSUE DATE:

1926-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160575>

RIGHT:

火星が近づく

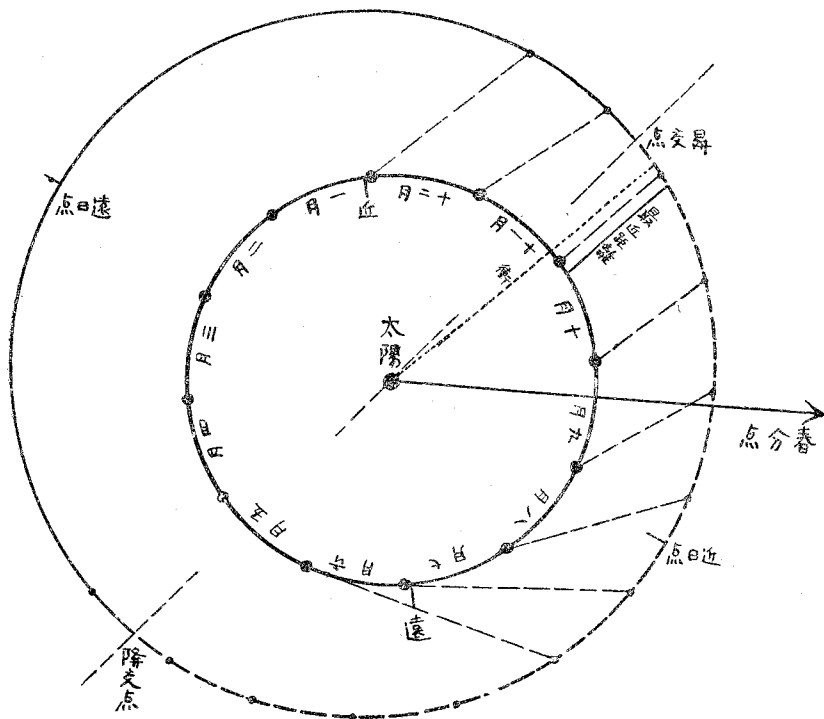
山 本 一 清

火星が、また、近づいて来る。

今年度の火星は下記のやうな状況によつて出現して来るこゝになつてゐる。

即ち、(時刻は日本中央標準時の天文時刻で)

- 1926年 1月18日、8時、 降交點を通過す(へびつかひ座24番星の北隣で)
- 4月 1日、3時、 火星世界の秋分
- 7月 9日、3時、 太陽と第一矩象(うさ座80番星の南で)
- 同 19日、1時、 近日點を通過す
- 8月25日、2時、 火星世界の冬至
- 9月29日、2時、 第一停留(ひつじ座テ星の南五度で)
- 10月27日、 地球に最近(距離6855萬キロメートル=1745萬里)
- 11月 4日、18時、 衝(ひつじ座のオー星とオミ星との中間で)



同 18日、13時、 昇交點を通過す(ひつじ座のクシ星の北三度で)

12月 8日、 9時、 第二停留(ひつじ座¹⁹番星の東南二度で)

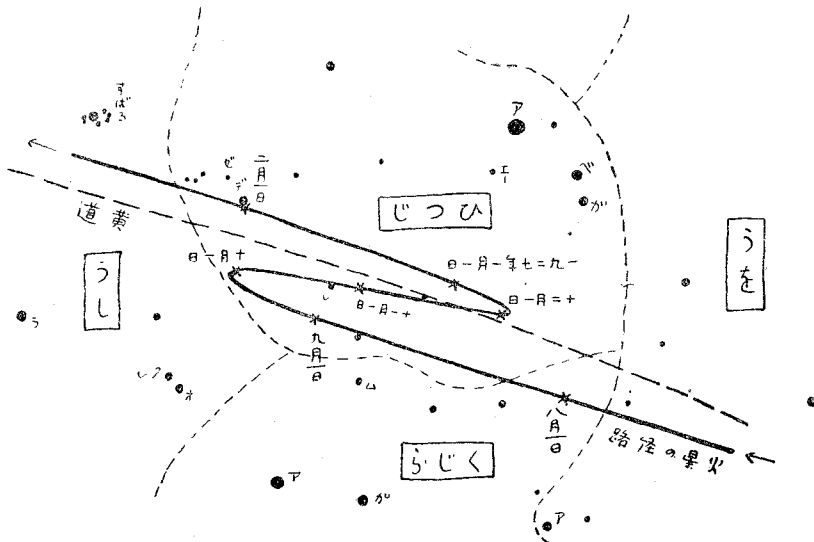
1927年 1月31日、14時、 火星世界の春分

まづ、火星は、今1926年の初めにはさそり座のべ星の東南隣にあつたのだが順行して、東へ東へ進むうち、一月中頃からはへびつかひ座に移つた。此の頃は地球からの距離も遠く、視直径も4秒ぐらゐで、單にアンターレス星と同じ位の輝やきを見せるに過ぎなかつた。二月の六日頃に火星はいて座に入り、直径は5秒、光輝は少しく増した筈なのだが、實際は大した違ひなし。三月二十日にはいて座からやぎ座に侵入し、此頃から地球が刻一刻火星に近づくこゝなる。四月一日には火星世界に、晝夜平分の秋分節が来る。地球からの距離六千萬里、視直径六秒に達し、そろそろ此の頃から火星の専門家は研究観測を始める。四月二十八日には火星が更に東漸してみづかめ星に入り、1星を掠めつゝ、徐ろに東へ北へ、赤道に近づいて来る。六月一日には愈々うそ座に移る。此のあたり、恒星天に大きな星が無いので、既に○等に近い火星は曉天を賑はす花形役者である。視直径も八秒を超える。七月末の頃は、黄道から南へ三度以上も脱線してゐるが、同二十八日には一旦くちら座に入り、八月八日には更に此のくちら座を出てひつち座に入る。これより六ヶ月間は、前に記した通り火星は一步も此のひつじ座の外に出ない。八月二十五日に火星世界は冬至の季節で、太陽は南極を照らし續け、北極は常闇となる。九月に入つて益々地球に近くなるが、今試みに來年一月末までの視直径の變化を書きならべて見るこ

	1926年				1927年
	九 月	十 月	十一月	十二月	一 月
1 日	14.6 ^秒	18.4 ^秒	20.3 ^秒	16.4 ^秒	11.7 ^秒
11 日	15.8	19.5	19.5	14.7	10.5
21 日	17.1	20.3	18.0	13.2	9.5

故に、今度は最大視直径が21秒に達しない。だから、大體に於いて1922年の時の接近期はさと同じ程度であるを見れば好い。九月の末に初期の留となるが、其の頃、火星は心持ち北へ進む。そして十月に入つて逆行に移るゝ共に漸次黄道に近づく。十月二十七日には地球と最近距離となつて、彼我の間は1745萬里となるが、之れも亦一昨年(1925年)の八月の末の最近距離1418萬里に比べると、少しく遠い。しかし、1922年の六月の最近距離が1740里であつたのゝ比べると、殆んど同じである。太陽との對衡は十一月四日午後六時に起る。此の頃、逆行運動が最も速くて、毎日、赤經が一分28秒づゝも西へ移る。十一月十八日には遂に火星は黄道面に到着して、之れを南から北へ横斷する。ゝ、間もなく十二月八日に後期の留となるが、やはり此の時も徐々ゝ北行してゐる。そして其の後は

元の順行運動にかへる。かういふ事状であるから、此度の火星は、天空に於いて、**ひつじ座**の中央にSの字形を畫くだけであつて、決して一昨年(1922年)の時のやうにループを畫かない。又、1922年の時のやうにカスプも畫かない。



此度の火星の光輝は、七月初めに既に0等級となり、九月一日にはマイナス一等級、十月二十日にはマイナス二等級となり、衝の前後ではマイナス2.1等級といふ最大光輝に達する。其の頃、日没後の天空の、西にはマイナス二等の木星が輝やいて、東天の火星の光りを競ふやうに見えるだらう。

1926年が暮れると共に、火星は光りも衰へ、地平へも近くなつて、あまり深更の夜まで待たずに西へ没するやうになるが、それでも、日没後暫くの間は可なり賑はしく空を飾る筈である。二月八日には**うし**の星に入り、同十六七日頃には**すばる**星團の南2度ぐらゐの所を通過し、三月十日頃には**ヒヤデス**團の北8度を掠め、遂に四月中頃、**うし**座を去つて、其の東隣の**ふたご座**に移るが、此の頃には最早や視直径も5秒に減じ、彼我の距離も遠くなると共に、西からは太陽も迫つて来るので、専門家も観測を打ち切るに至る。

之れを要するに、今度の火星の見頃は八月の初めから來年三月初めに至る半年間であつて、此の間、天空に於いて、火星は其の逆行道程を**ひつじ座**に終始するこゝこなる。故に之れを一昨(1924年)や、更に其の以前の1922年の時に比べるに、火星の平均赤緯は北14度前後であつて、吾人北半球に住む者に取つては誠に觀望し易い場所である。だから、わが日本は言ふに及ばず、殊に一昨年(1922年)の赤緯が低かつたため全く観測不可能であつた中央歐羅巴の天文家たちは、今

年の夏から秋にかけて、大に活躍するであろう。

今年の観望時季に於いて、火星世界は冬の最中である。そして、地球の方へは南半球を好く見せてくれるのであるが、其の邊一帶は、暑熱の季候であり、従つて、南極の極冠は一般に小さい。北極の極冠は大いに發達する筈であるが之れは吾人には観望しにくいだらう

續 星 座 百 首 (其の三)

某 女

27. 矢 座

小狐を 北に鷺座を 南にて
東西しらぬ 矢星座かな

28. 海 豚 座

海豚座の 北は小狐 西は鷺
東はベガス 南駒に瓶

29. 駒 座

駒星座 水瓶海豚 ベカソスの
三の星座に 圍れてあり

30. 桶 座

桶星座 西北東 鷺と蛇
南一對 射手座なりけり

31. 黄 道 星 座

黄道に ならふ星座は 牡羊や
乙女獅子など 十二座としれ

32. 牡 羊 座

牡羊は 黄道星座の 第一(はじめ)にて
牡牛座の西 魚の東

33. 牡 牛 座

黄道の 第二番なる 牡牛座の
西は牡羊 双子座

34. 双 子 座

双子座は 黄道星座の 三番目
東は蟹座 西は牡牛座

35. 蟹 座

蟹星座 双子の東 獅子の西
黄道星座の 第四番目なり

36. 獅 子 座

獅子星座 黄道第五に 位して
乙女座の西 蟹の東

37. 乙 女 座

乙女座は 黄道星座の 六番目
東は天秤 西は獅子なり

38. 天 秤 座

天秤座 東は蝸 西乙女
黄道星座の 第七位なり

39. 蝸 座

蝸座は 黄道星座の 第八位
天秤(ハカリ)の東 射手の西なり

40. 射 手 座

射手座 サソリを西に 山羊東
黄道星の 第九番目なり

41. 山 羊 座

山羊星座 射手座の東 瓶の西
黄道星座の 第十番目なり

42. 水 瓶 座

水瓶は 魚座を東 西を山羊
黄道星座の 第十一位なり

43. 魚 座

黄道の 第十二番目は 魚座にて
東牡羊 西は水瓶